

●心的現実がDVの本体

このテーマをいただいたときに思ったのは、「こころの暴力」というのはあるのだろうかということ。DVというのは方法が違うだけで、最終的には相手の心に対する打撃を目的にしているのだから、こころの暴力というふうにとくに上げる必要はないのではないかと個人的には思っています。

一般的にわかってもらうということを考えると、あざがあるとか、骨が折れたとか、診断書があるとか、そういう事実があると、あなたは被害を受けたのねとわかってもらえるということはありませんし、自分でも鏡を見て、これは被害を受けたんだというふうにもなります。

心理学とか精神分析学で言う心的現実というものがあります。例えば、すごく胸が引き裂かれるような思いがすると言っても外からはわからないけれど、感じている人にとっては現実なわけです。だから、心的現実が実はDVの本体だとすれば、もともとDVというのは非常にわかりにくいものということになります。それをわかりやすくしているのが、けがであったり、物が壊れたり、首にあざが残ったり、になります。

DVの本体というのは被害者の心的現実というものが一番大きいということをもっと最初にお伝えしていきたいと思えます。

私は原宿カウンセリングセンターというところでカウンセリングをしています。私たちは1年間に2回、どういう主訴が多かったかをまとめています。95年12月に設立以来、過去20年ぐらいをずっと見ると、当初やはり一番多かったのはアダルトチルドレン、ACという主訴でした。

ACというのは今日の話と少しかかわるのですが、自分が大人になってから何か生きづらい、人間関係がなぜこんなにうまくいかないのだろう、などと考えたときに、自分が生まれ育って以来最も深い影響を受けた親との関係がこの生きづらさの背後にあるのかもしれないと認めた人のことをACと言います。

95年の終わりから2000年ぐらいになるまで、その当時はDVという主訴はほんのわずかで、多くのひとたちの主訴がACでした。しかし、実際のカウンセリングの場では、夫からどなられてしまったり、本当に何回も殴られて鼻の骨にひびが入ってちょっと曲がっちゃったとか、しょっちゅう夫から蹴られるので腰の骨が変形し、40代なのに杖をついている女性は何人もいました。でも、当時はまだまだ私がこんな思いをするのは生育歴のせいじゃないか、親との関係でも虐待を受けてきたから、だからああいう夫を選んで私はこうなるんじゃないかという方が結構いました。

そのときも今も、それはそうかもしれないけれども、因果関係というよりも今起きている被害、今起きている暴力のことを扱うのが大原則なので、そのような女性たちには

「ご自分がACだと思っていらっしゃるのはよくわかりましたけれども、現在暮らしている夫からの暴力について考えてみましょう」とか、「それは暴力でDVと呼ぶんですよ」などとお話ししてきたのです。

2001年に「配偶者からの暴力の防止及び被害者保護に関する法律」(DV防止法)ができて、その結果、私たちのカウンセリングにもDVに関する相談が増えてきました。2016年はDVの加害者・被害者などの合計は全体の13%にのびます。ここ8年ぐらいは、それと同じかもしくはそれを超える人数です。2007年には別途NPO法人(RRP研究会)を立ち上げて、DVの加害者プログラムを実施しています。

またいっぽうで、10年来、RRP研究会の主催で、DV被害を受けた母子のプログラム(コンカレントプログラム)を実施しています。最近頻繁に用いられるようになった「面前DV」、子供が父から母、時には母から父への暴力を日常的に見ている、もしくは、別室でその気配を感じて凍りついたようになっている。その経験は子供への心理的虐待であると考えられるようになり、ここ3年ほどは警察が積極的に介入して児童相談所に通報し、見相も通報を受けたら処遇をしなければいけないことになりました。

そうすると、DVへの対応は、被害者のみに焦点を当てていくのではなく、DVの加害者プログラムも必要であり、一方で子供のこともプログラムを実施していかなければならないということになります。まさに面前DVは子どものところへの暴力なのです。

原宿カウンセリングセンターでは、2003年からDV被害者のグループをずっとやっていますが、参加者のうち、明確な身体的暴力のある人は3分の1です。有料の相談機関であり、お金や時間をやりくりをして相談に受けにくるという人たちが対象であることや、公的な支援機関だと、やはり精神的DVだとなかなかストレートに扱ってもらえないこともあって、結果的に私たちのところに集まってくるのではないかと思っています。DV被害者のグループ参加者の3分の2は全く身体的DVがない、という構造は2016年の今も変わっていません。

アメリカのドゥルースという街で1970年代の終わりごろにできた「車軸の図」というものがあります。DVの本体は、パワーとコントロールだという図です。日本でも90年代の終わりに入ってきて、それをよく見ると、身体的暴力や性的暴力はごく一部で、相手が自分に対して力(パワー)と支配(コントロール)を行使することがDVの本体だとすぐよく分かります。

身体的暴力は支配の方法の一つにすぎず、それも非常に稚拙で粗野な方法です。殴る、蹴るという行為を自分が受けたら、相手を心から軽蔑しなければいけません。しかし、殴ったほうは、それを正当化する理由を持っています。加害者プログラムの参加者のほとんどが、僕はここまで追い詰められてもう我慢できない、だから殴ったという心的現実です。

なぜ僕がここまでやっていることを妻はわからないんだ、俺が理屈じゃおまえにかなわないのはわかっているだろう、それなのに、なぜそんなことをしゃべるんだという思いが限界まで達したから殴るんだ。だから、どちらが被害者かといったら僕のほうですよという人が、加害者プログラム開始当初の参加者の90%に達します。これをどのよ

うに変えていくかがプログラムの大きな柱になります。

●何を用いて支配するか

私たちは、男女を問わず、家族の中でいろいろな人を支配したり、されたりして暮らしています。では、何を用いて支配しているのでしょうか。

女性は圧倒的に言葉です。言葉を使って支配する。あとは、態度です。ドアを荒々しく閉めるとか、テレビのリモコンをバンと置くとか、そうやって、自分がこんなに怒っているということを示す。これで、一定程度相手を支配することはできます。

もう一つは、子供を使う。自分の味方に引き入れる。女性の場合は父親がいないときに、自分がいかに父親の犠牲になって生きてきたか、それはあなたのため、と言い聞かせる。男性の場合は、自分の言うことを聞かない子供がいたときに、妻がそのように子どもに吹き込んでいるのだと言います。それを知っている子供は、母に暴力が向かわないよう、父親との同盟関係に入ったふりをすることもあります。DV被害を受けた子供が全部お母さんの味方をするわけではなくて、中にはお父さんとタッグを組んで、ともに母をばかにするという子どもも多いのです。家族の中を生きていくためには、強いほうの陣営に入ったほうが身を守れると判断するのです。

それから、お金で支配することもあります。私の一番新しい本は「家族のゆくえは金しだい」（春秋社、2016）というタイトルですが、子供の問題もつまるところはお金の渡し方の問題だったり、DVの問題も最後は調停や離婚裁判で財産分与や婚費というお金の問題になってくる。それは、お金が生存の手段だからであり、そこに力関係が出てきやすいからです。

さらに、空気を用いて支配することがあります。実際には、目つきとかため息ですが、何か言われたときに「はあーっ」とため息をつくことで、周囲が本当に凍りついてしまいます。今日、お父さんの機嫌はどうだろうとびくびくしていると、父親が咳払いをただけで、家族の雰囲気はピッと固まります。DVの家族はこのように空気そのものが、ピリピリして緊張しているということです。

もう一つ、意外と多いけれど知られていないのが、無視です。気に入らないことがあるとずっと無視をする、返事をしない、顔を見ない、でもご飯は食べる、洗濯物は出すという訳の分からない状態が何か月も続くのです。たいてい妻はまいってしまい、胃潰瘍になったりします。このような無視も、静かではありますが、ひとつの支配です。

●権力とは状況の定義権

ミッシェル・フーコーというフランスの社会学者が、「権力とは状況の定義権である」と言いました。どういうことかという、例えば、きょうは10月ですが、カリスマ的な人が、皆さんきょうは12月ですよと言って、それ以外の判断が許されなかったとすると、今は12月だと思わなければならない。このように状況を定義する力を権力と言うのです。

これを家族に置きかえてください。夫が言うことに、自分はそうじゃないと思っても、

俺が言うからこうなんだと夫が言えれば反論できないでしょう。それこそが権力なんです、そんなことが起きたら心の中で「これがでフォーだわ」と思ってください。DVの加害者プログラムを実施していると、こんなことはしょっちゅう出会います。彼らは、自分が正しいと思っていることをなぜ妻が正しいと思わないのかと腹を立てるのです。正しさはたったひとつ、それもいつも自分が正しい、これが彼らの世界なのです。まさに権力者です。

自分たちが合意したことを、妻が破ると怒るのです。例えば、ディズニーランドに行くのに朝7時に起きることを夫婦の間で合意したのに、朝になったら妻は熱が出て、ちょっと無理だと言った。夫は激怒して、ものを破壊し尽くす。なんで約束を破るんだと。もう止められそうもないとき、熱を出した自分が悪い、約束を破ったから私が悪かった、そう思わないでください。これは状況の定義権を行使しているんだ、これこそ権力なんだなと心で思ってください。そうすることで、状況は変わらないかもしれないけれども、捉え方がある意味、夫の上を行くことになり自分が悪いという方向にいかないですむ。

家族における価値判断の基準は、全てこのAさんにある。そして、Aはいつも正しい。Aに反論する人は間違っているし、AはBさんに対して何をしてもいい。これがDVの基本的な構造です。Aは夫でBは妻です。Aに反論するBに対して、お前は間違っていると怒る夫もいれば、君の正しさを見せてくれ、証明しろとねちねち攻めてくる場合や、俺はおまえに反論されるようなだめな男だから、この家を出ていくよというふうに脅しに出てくる場合もあります。

どういう出方をするかは別にして、自分が正しいと思ったことは絶対間違っていないと思っているわけで、これがやはり状況の定義権というもので、これこそが権力なのだということなのです。

●シャットアウトと自責感のデフレスパイラル

DVで一番問題になるのは、家族というものが外からの視線をシャットアウトしていることです。ここにAさんがいて妻がいると、できるだけAは外からの視線を届かないようにする。妻が自分の人間関係をつくるとすごく不機嫌になったりする。友達と遊ぼうと思っても夫がうちでどんな顔をしているか、夫の不機嫌なオーラを考えると早く帰ったりする。そそくさと帰る女性に対して、友達から「最近元気がないね」とか「それはDVじゃないの」という言葉が出てくるようになりましたが、これはDV防止法ができた2001年以来15年間の成果だと思えます。

夫はそういう友達がいるらしいことをなぜか鋭く感知します。ものすごいです。夫は妻の雰囲気ちょっと変わると敏感に感じるのです。ですから、DVの問題というのは、シャットアウトが問題で、この目に見えない夫のシールドがあると外の世界に行けないので、これをどうやって超えるか、どこに突破口をつくるかということが今の状況を超える第一歩です。

強制（身体的暴力）というのは、規律的支配を伴っています。たいてい暴力をふるわれ

る、強制される自分が悪いという方向にいくのです。つまり、夫の言うとおりにできないのは自分のせいだ、夫をうまく扱えない自分がだめなんだ、夫を怒らせる自分が悪いというふうになる。これをぐるぐると考えてしまい、最近ではここに夫は発達障害という言葉が入ってくるようになりました。一応経済的収入を得ている夫であれば、発達障害という言葉は現状をあきらめるための役割を果たすことになります。発達障害だからしかたがない、そう考えて日々を耐えている女性は多いようです。

見えない支配というのは、言葉の暴力によることが多い。体のどこかにあざがあれば、これは暴力だと思えますが、あざがないとそうは思えない。パートナーの側に起きる考えは、やはり私が悪いんだと自分を責める。夫は夫で妻を責めます。彼らは、被害者は自分だと思っているからです。この構図は頭に入れておかないといけません。

DVというのは、加害者が夫、被害者が私という構図を当てはめるとしっくりこない。パートナーは自分が悪いと思ひ、当の夫は、俺は被害者だと思っている。これがDVなんだと思わないといけません。一般的な加害者、被害者が実は意識の中では逆転しているということです。このからくりを知らないと支援の仕方が少し粗雑になることもあるのではないかと思います。

この自責感には、本当に出口がありません。自分が悪いと思っていますから、自分が傷ついていると思わない。誰かに傷つけられていると思えば出口があるのですが、自分が悪いと思っていますと出口がない。次第に元気がなくなり、夫にされたようなことを子供にしてみたり、子供にこんなはずじゃなかったのにと愚痴を言ったりします。

中には、絶対に愚痴を言わないで全部自分で抱え込む人がいますが、それがあるとき限界になって鬱っぽくなってしまったり、パニック障害になったりする。そして、夫を見るとびくびくおどおどしたり、世間が怖くなって引きこもりがちになる。そうするとますます家事がうまくいかなくなり、夫に責められる。また、私が悪いとなって、ここでもデフレスパイラルが起こる。

●必要なのは加害者の生態等の知識

では、これはDVかもしれない、もしくは、果たして100%自分が悪いのだろうかというポイントがどの段階でやってくるのでしょうか。実は必要なのは知識なのです。あまり本を読まない人でも、女性週刊誌や雑誌でもどこかにDV関係の特集があり、そういうところで得た知識を自分に捉え直してみることがすごく必要です。

私の考えですが、DVに関する知識の中で心理学というのはあまり意味がないと思っています。それよりも社会学とか国際政治のニュースのほうが役に立ったりします。力を使いたい人がどう動くかが一番わかるのが国際政治だからです。

ですから、大事なことは、DV加害者の生態を知り予測可能にすることです。台風も大体進路がわかると用心できるように、知識があると大体予測ができます。自分の経験を家族の力関係から捉え直すと、自分の親子関係にも応用できたり、両親の関係を読み解くところだったと見えてくる。家族関係の認識が変わって、今後の自分の行動が少し賢くなっ

たりすることはあるかもしれません。

●平等 (EQUALITY) と公正 (EQUITY)

最近、DV 冤罪とか偽DVという言葉がよく使われ、マスコミの問題の焦点は、女性から男性へのDVに移っています。テレビは新しいもの好きですから、DVで被害を受けた女性や加害者の夫がこうだということは、ニュースバリューがない。それだけ夫から妻へのDVは市民権を得たということの証明かもしれませんが、どうやって妻が夫に暴力を振っているかが今は受けるのです。

加害者プログラムをやっていると、「そんなことを言ったら俺は妻に負けた気分がする」という人はよくいます。屈辱感とか、やはり自分が妻より上にいなければいけない、上にあってこそ男だという信念がある。本当に彼らが普段考えていることがよくわかるし、実は彼らはすごくシンプルで、複雑な人はいないです。

平等ということがよく言われます。男女共同参画も、もともとは男女平等だったが、平等という言葉を嫌う人がいて共同参画となった。その副作用で男女共同参画だからと男性の相談もしなければならぬ時代になりました。

「平等」(EQUALITY) というのは、例えば野球の試合をフェンス越しに見ている身長の違いの子供に対して、みんな同じ高さの踏み台1台ずつ用意するということでしょうか。そうではなく、背の低い子供には踏み台を2段積み、真ん中の子供は1段、一番背の高い子供は踏み台がない状態にする。これは、条件から言えば確かに不平等ですが、その人の状況に合った必要な援助を受けることによって等しく試合を見られるという意味で「公正」(EQUITY) なことです。

しばしばネット上で、女性はいいよな、優遇してもらえるし、生理休暇もあるという話が出ますが、それはおかしくないですか。毎月の排卵日があって、生理があって、妊娠したら大変な思いをして通勤して、子供を産んで仕事をするという女性には、高い踏み台が必要なものであって、それが「公正」ということです。

実は、DVという考え方の基本には、男と女は完全に平等ではないという認識があります。それは生理的なものだけではなく、社会の状況もそうです。公務員合格率や給料、体力もまったく同じ、男女が完全に平等であれば、DVの多くはなくなるかもしれません。そして女だって男を殴りますよ、と冗談で言うかもしれません。

夫婦間の殺人は、確か、男の加害者率が95%ぐらいです。ストーカー殺人の加害者も男性がほとんどです。いざとなった時に殺すだけの力を持っているのは男の方なのです。女も男を殴ったらDVでしょうと言うのは単なる「平等」の考え方でないかと私は思っています。男と女の間にある差、差別というものを私たちは意識しないように生きている。しかしあらゆる場面で出会う不平等さを直視すれば、やはり「公正」さというものを考えないとまずいんじゃないでしょうか。DVというとらえ方も、それによってよく見えてくると思います。

●優位にある側は自分の力に無自覚

現在ふつうと思われている家族を近代家族といいます。それが誕生した17世紀以降を考えると、男性がより効率的に働けるために家族はできているのです。もうひとつは、次世代の優秀な労働者を育てるようになっています。何もなくポワーンとしていると、付き合っていた頃は一緒だったのに20年経ったらすごく夫が威張っているとか、夫の機嫌を伺っている自分に気づく。これはその女性個人のせいではなく、家族という仕組み、それから世の中の空気のような常識が大きいと私は思います。

ですので、皆さんはもちろん、男性たちも被害だけでなく加害についても知るのすごく大事です。これは女性でもそうです。実は、自分に力がある人は自分に力があるとは思っておらず、当たり前だと思っている。自分の力を自覚していない。しかし、周りにはそうは見ないので、自分が優位にあるかもしれないと思ったら、わざと自分を下げなければいけないのです。持てる力を制限するのです。

それと反対に、力で劣位にある側は、相手の力に敏感です。たとえば会社の上司は、自分にはそうしたつもりはないけれども、部下を傷つけてしまったりします。ハラスメントの多くはそれで起こります。DVも全く同じです。やる側はやっている意識はない。むしろ被害者だと思ったり、当たり前だと思ってやっていることを、妻は傷つき本当に苦しいと言う。では、そういう妻の感じ方がおかしいのでしょうか。

世の中の流れは、力の劣位の側である妻の感じ方や経験をちゃんと認めるべきという方向に動いてきています。ハラスメント防止法も、DV防止法も、虐待防止法も、全て弱者の側の心的現実に基づいて判断するように動いてきていますので、皆さんには自信を持っていただきたい。

そして、男性には、男性であることのメリットをいろいろ享受しているのだと自覚して、できるだけ自らの力を抑えるように、そして、自分は平等だと思っているけれども、周りからは力を持っているように見られるかもしれない、ということを感じていただきたいと思います。

簡単に言うと、身体的暴力は絶対に振るわないようにしなければいけないし、経済的に自分が中心だと思えば、その力を妻に行使しないようにする。まかり間違っても、だれのおかげで食べていられるのかなどという、人間としてもっとも恥ずべき言葉だけは口にしないでいただきたいと思います。それを一言でも言った瞬間に、その男性の価値はゼロもしくはマイナスです。地方都市に行くと、うちはしょっちゅう言われていますと言う人がいるが、それはあってはならないことなのです。

ですから、皆さんは、できるだけ知識を獲得して、人に話をし、できればグループに参加して仲間を持つ。そして、必要に応じて医療機関を利用し、時には弁護士にも相談し、あとはカウンセリングを利用していただきたいと思っています。

<質疑応答>

Q1 加害者には今後かかわりたくないが、法的に認められていないように感じる。面会

交流は、加害者に変化が見られない場合には拒否したほうがよいか。

A よいと思うが、それだと今は別れることが何かと難しい。今、親子断絶防止法案が国会で議論されているが、これが通ると夫を置き去りにできなくなる。私達は、夫の側に少なくともこういうことをしないと月 1 回も面会交流ができないというような、何らかの条件をつけられないかについて考えている。

会わせたくないというのは、私は肯定してよいと思います。大変ですが頑張ってください。

Q2 こころの暴力を含めたDVについて、親や身内がわかってくれる関係であると離婚や離れることが容易にできると思うが、できないのは、身内との関係性があまりうまくいっていないと考えたほうがよいか。

A 離れる時に実家が支援するという例はあるが、そんなに多くない。娘がDVを受けていることに理解を示す親は多くない。理解しない親との関係が問題だと考えると本人が抱え込めなくなるので、親にはあまり期待しないで、まず夫から離れることを考える。

今の被害者支援は、ある程度は実家の家族に依存しなくても夫から離れられるようなシステムができてはいるはずだから、実家はあまり頼らないでやることを心掛けられてはどうでしょうか。

Q3 周りを見ていると、あまり行くところがないとか、シェルターは嫌だという話をよく聞くが、どうなのでしょう。

A シェルターが好きだという人はいないですね。シェルター入居の条件があり、すぐ入れるわけでもない。東京はよく探すと民間でも一時的に1週間ぐらい入れるところはある。DVを受けていると思ったら、ビジネスホテルとか安いホテルに1週間ぐらい泊まれるだけのお金は持っていたほうが自由に行動できると思う。

Q4 夫との仲があまりよくないと聞いていた友人について、一人息子がとてもなついていてかわいかったのが、高校生になった途端に彼から暴力を受けるようになってパニック障害を起こした。息子の前での面前DVがあったと考えてよいか。

A 友達の話の正確に判断するのは難しいが、DVと判断してもよいのではないかな。ここで質問された以上、ぜひ力になってあげてください。

Q5 日常的にDVを見てきた娘が、成長して大人になった今、私をいろいろ責めてくる。そのような子供に、どのように手を差し伸べたらよいか。

A それはとてもよくあります。一言でここでこうやってケアしたらよいという方法を言うのは難しいかもしれない。ケアの対象になるべきだと思うが、ケアをするのは当の母親なのか、誰がケアすべきなのかはいろいろな見方がある。

お母さんがお嬢さんから責められるのは、理不尽なことですね。それをケアしなければいけないとなったときは、やはり第三者に入ってもらうか、もしくは専門機関にまずご自身が行って、娘さんのカウンセリングにつながるようにしてはどうか。

Q6-1 先生の著書の中に『加害者臨床の可能性』とか『加害者は変わるか』というものがあるが、加害者は、自分の感情をコントロールできないことに苦しむこともあるのではないかな。

A ないですね。そんなものはないです。あの人たちは自分が被害者だと思っている。感情をコントロールできなくて苦しいなどという上質な人はいないです。

Q 6-2 脳に変性が起きて、つまり家族がばらばらになったり妻が悲しい思いをすることに対する呵責はないのですか。

A 自分のせいだと思っていないから。だから、彼らは DV で逃げた妻を殺す。わがまま女め、なぜ俺たちを置いて出て行ったんだと。加害者が変わるか、について一言で言うのは難しい。本を読んでほしい。

Q 7 ミッシェル・フーコーの理論を聞いて納得したのだが、ネット上である有名な心理学者が、モラハラで PTSD になるのはナンセンスだとか、日常的な身体の DV がないと DV ではないと言い切っていた。そういう人は放っておけばよいのか。

A 相手にしないというのが、私などは一番の自己防衛です。相手にした途端に足をすくわれる。

Q 8 入退院を繰り返し、病院にも通っているが、内科では精神的なものだと言われ、心療内科では時間がなくてきちんと聞いてもらえず、鬱症状に対する薬を飲んで胃腸炎がひどくなるという繰り返しである。診療内科に行けず、カウンセリングはお金がかかって行けない。やはりカウンセリングに行かなければ治らないものか。

A 今の内科医、心療内科医、精神科医は、残念ながら 10 分診療で薬を出すというのが実情で、カウンセリングはお金がかかって、どこにも行けない方は多分ものすごく多いと思う。そういう現状を知っていてあえて言うが、長い目で見たときに、今ここでお金を使う意味があるのではないか、お金がないから選択肢から外すと 3 年損すると思えば、今の家族の現状をわかってくれて、DV の問題にも詳しいカウンセリングに一度電話をして行ってみることがきっかけになるのではないのでしょうか。

いろいろなできないことがあるときは、その中でも今、自分ができることは何かと考えないと、深い淵の中に沈んだまま時間はあつという間に過ぎますから、人生を無駄にしないようにしてください。